



あさみどり

すみわたりたる

大空の

広きをおのが

心ともがな

明治天皇御製

『人と自然』

平成三十二年に伊勢山皇大神宮は御創建百五十年を迎える。昨年、伊勢神宮より第六十二回式年遷宮で建て替えられた社殿の古社殿が一字そっくりそのまま伊勢山皇大神宮に下げ渡された。この古材は平成三十二年のご創建百五十年の節目の年までには伊勢の神宮に在った時のままに茅葺の唯一神明造で伊勢山皇大神宮の御本殿として今の建物と建て替えられる。古材とはいえ神宮の地で二十年しか経過していない、薄く鉋をあてると木肌は輝き、ヒノキ特有の香りが漂い新しい材と全く遜色はない。

茅葺、掘立柱の唯一神明造の社殿は、おそらく伊勢の神宮以外では全国でも例が無いだろう。そこに御神霊をお迎えし横浜総鎮守として奉斎できることは大変有り難いことで勝る喜びはない。

同時に柱の損傷が著しい拝殿も建て替えられる。この

『常太刀会奉納演武』 5月24日(日) 午後1時半 執行



各流派による奉納演武



修 剣

拝殿の材料となるヒノキの伐採式が吉野の山中で執り行われた。伐採される木に注連を張り神酒、米、塩等の献げ物をして山の神、木の神、木の魂に感謝の祭りを行なわれた後、森閑とした山気の漂う中でヒノキの大木は倒れていった。

神道では山・川・海に神を祀り、あらゆるものに命を認める。これに日本人はそれほど違和感を覚えないであろう。日本の仏教でも一木一草に悉く仏性ありと説く。

同じ考えが二十世紀の終わりのころからアメリカの学者を中心に唱え始められ環境倫理学としてまとまりを見せている。その環境倫理学は『人間だけでなく、生物の種、生態系、景観などにも生存の権利を認めよう』という考え方である。自然は人間とは別に存在するものである。人間が利用するために自然は存在するという今までの西洋的な考えでは、いずれ地球環境は破壊されて人類



修祓



参進

の生存に悪影響を及ぼすだろうという危機感から生まれ
た。

環境倫理学の主張は大きく三つある。分かりやすく簡
単に言うと

一、すべてのものに命のあることを認めよう。山、土
地、川、動物、植物にも生きていく権利がある。

二、現在を生きている我々は未来の世代に対して責任
がある。今生きている自分たちだけでなくこれから生ま
れてくる子孫が生存していくことにも配慮をしなければ
ならない。

三、地球は有限の閉じた世界である。いつまでも持続
が可能な循環型の社会を作らなければならぬ。

これらの主張は西洋的な考え方では画期的なことだが
東洋的、ことに日本人にとっては目新しいものではない。
日本の神話では日本列島を始めとして、すべては神様が

『例祭』 5月15日(金) 午前10時 齋行



巫女舞(浦安の舞)



崇敬会初穂

ら生まれたもので命を認めるにやぶさかではない。また名跡を継ぐという習慣が残っている。神道の中今という言葉は今いる自分は祖先と子孫とを結ぶ位置にあり、その判断と行動は当然に両者に責任を負う。芸能、芸術、旧家のしきたりには今でも名跡を継ぐという習慣が残っている。神話では天照大神は天孫降臨にあたり稲の穂をお与えになり稲作により国土を治めれば天地共に窮まりなしと告げられた。稲作こそ日本列島で暮らすには持続可能な循環型農業である。

環境倫理学の概念が生まれる前から、暮らしの中で持続可能な循環型の一年が祈年祭から始まり新嘗祭で締めくくられる社会が形成されていた。

子孫の未来に危惧を感じている今こそ日本人が持っていた古来の考えを新たに見直す時ではないか。

『大祓式』 6月30日(火) 午後1時・午後4時 執行



茅の輪神事



解布(祓物)



創建 150 年記念事業

御杣祭

拝殿の御用材を伐採する祭儀。

平成 26 年 10 月、吉野（奈良県）の山にて執り行われました。





御用材 (ヒノキ)

伐採された御用材は現在、水中乾燥を行っています。

古来より伝わる技法のひとつで、丸太のまま約3年間水に浸した後、1年間かけて乾燥させます。これは神宮の式年遷宮の御用材にも行われている技法で、当宮でもより良い木の性質を後世に残す為に行っています。

伊勢山皇大神宮 年間恒例祭典

十一月二十三日	十一月十五日	十一月三日	十月十七日	九月秋分の日	九月十五日	八月二十日	六月三十日	五月十六日	五月十五日	五月十四日	毎月一日・十五日
新嘗祭	七五三祭	明治祭	神嘗奉祝祭	秋季皇霊祭 遥拝式	敬老祭	杵築宮並 子之大神例祭	大祓式	後宮祭	例祭	宵宮祭	月次祭